

| | |
|--------------|---|
| Title | 大阪大学「共同研究講座」事例：ピアス皮膚再生技術 共同研究部門における産学連携の取り組み |
| Author(s) | 前田, 明人 |
| Citation | 年次学術大会講演要旨集, 27: 780-782 |
| Issue Date | 2012-10-27 |
| Type | Conference Paper |
| Text version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/10119/11137 |
| Rights | 本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management. |
| Description | 一般講演要旨 |

大阪大学「共同研究講座」事例

ーピアス皮膚再生技術 共同研究部門における産学連携の取り組みー

○前田明人（大阪大学）

1. はじめに

ピアス皮膚再生技術 共同研究部門は、2009年より大阪大学先端科学イノベーションセンター（2011年に大阪大学産学連携本部へ改組）に設置された。間葉系幹細胞の活性化因子の研究を基盤として、新しい体内誘導型の再生医療技術、特に皮膚や毛髪組織の再生及び高機能化のための技術を開発することを目的としている。第I期の3年間は、幹細胞の活性化物質の探索を行い、2012年から始まった第II期では幹細胞活性化物質の有効性評価を行っている。産学の共同研究の性格上、基礎研究の深耕と産業面との統合の両面を追求しているが、限られた資源で行うには共同研究体制のバランスやバリューチェーンへの意識が重要になる。本報告ではピアス皮膚再生技術 共同研究部門の活動を通して、共同研究講座による産学連携のメリットや運営に関わる諸問題について考察したい。

2. ピアス共同研究部門の立ち上げ

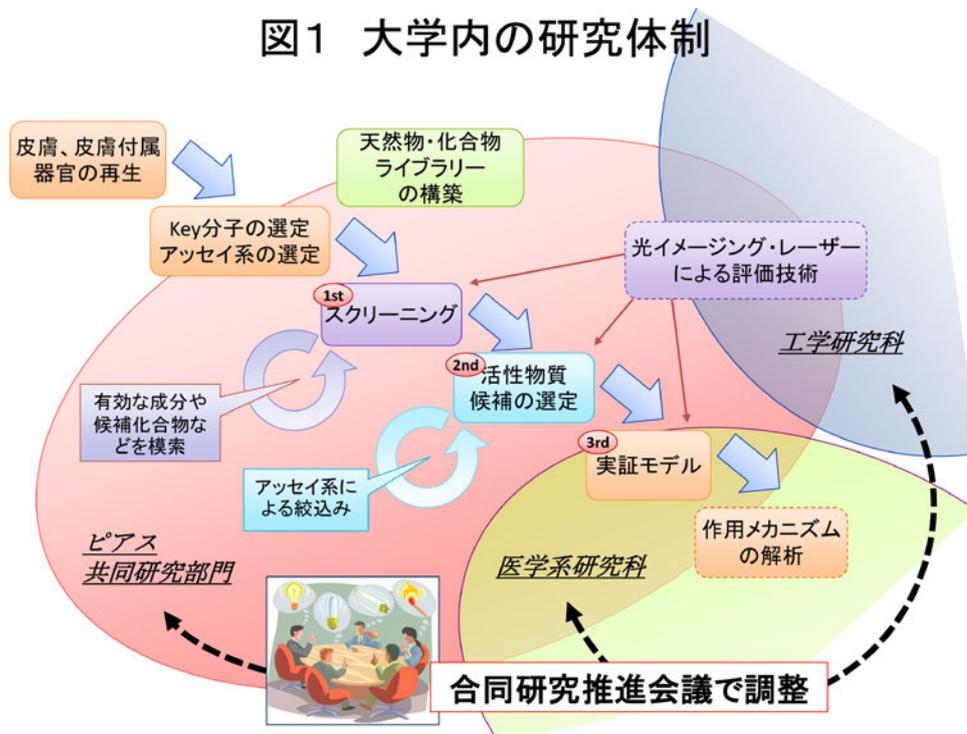
設置の前年、化粧品・健康産業メーカーのピアス株式会社が新技術開発のため、銀行系の人脈を通して大阪大学へ共同研究のアプローチがあり、共同研究部門を設立することで話がまとまった。そしてピアス共同研究部門の立案においては、大阪大学で見出された間葉系幹細胞の活性化に関する研究成果をもとにして、体内誘導型の再生医療技術を開発し、それを利用した皮膚組織の再生に関する応用研究を推進していくことを目標とした。その成果は、不明な部分の多い間葉系幹細胞機能の学術研究にとって極めて重要な情報をもたらすことになり、また医薬品や化粧品へ応用することで皮膚の再生促進・高機能化を可能にする点で社会への貢献も大きい。さらに将来は、多くの生体内組織に対して同様のコンセプトを生かした新しい医療技術の開発にまで結び付ければ、国民の健康寿命の延伸に寄与することも期待できるものである。

共同研究部門の体制としては医学系の研究

成果に加え、全学的な部局の支援を受けて、相当の技術を有する複数の専任教員が取り組む必要があり、学内共同研究施設である先端科学イノベーションセンター（当時）に設置された。

共同研究部門の研究方針では、間葉系幹細胞を活性化する物質の分子生物学的な研究と、有効物質の

図1 大学内の研究体制



参考文献

1. 馬場章夫「地域に生き生活に伸びる 大阪大学の Industry on Campus について 共同研究講座の活動を中心として (2011 年 12 月 10 日「第 2 回大阪大学共同研究講座シンポジウム Industry on Campusーオープンイノベーションの新たな形」 前刷集 P.7-14)」
2. 大阪大学産学連携本部「共同研究講座制度について」(大阪大学ホームページ[産学連携本部] - [各種制度・規定] - [共同研究講座])
3. 後藤芳一、奈良敬、三浦雅博、馬場章夫 「大阪大学「共同研究講座」 ー産学官連携「第 4 の潮流」に向けてー」(2011 年 10 月 15~16 日 研究・技術計画学会 第 26 回年次学術大会 講演要旨集 P42-45)
4. 前田明人「皮膚再生のための新技術創出に向けた取り組み ピアス (皮膚再生技術) 共同研究部門」(2011 年 12 月 10 日「第 2 回大阪大学共同研究講座シンポジウム Industry on Campusーオープンイノベーションの新たな形」 前刷集 P.39-44)」